

ことで、厚生省にもない。そんなことで、軍歴十二年以上あっても恩欠者というわけです。

今の私を形成した

ミンダナオの戦場

熊本県 稲田 勇

―稲田さんは、青少年へ贈る言葉「わが人生論」という書物に「苦勞の尊さを考えよう」という文を書かれています。その中で「私たちは戦争中という特殊な情況の中で成人した。そのころの若者には青春という言葉は知ることなく過ごしてしまつたように思う。決して幸せな時代ではなかつた。しかし強い精神力や忍耐力は今の若者に足りないものを学び得たように思う。…」朝鮮から比島のミンダナオ島を転戦、終戦まで悪戦苦闘の末、二十年暮復員した。ぼろぼろの服にはだしの「乞食」同然の姿で横須賀に上陸した。…」とあ

ります。

復員後御苦勞を重ね彫刻家として名をなされ、「彫刻の仕事に取り組み、はや四十年、すでに老年期を迎えた今なお彫刻家を志した時と同じ心情で製作に取り組んでいる。今後生ある限り芸術としての彫刻に向かつて挑戦して行きたい。」と結んでおられますが、その力の原点ともいふべき戦争のご苦勞をうかがいます。先ず、何年徴集で、朝鮮へ何時行かれましたか。

私は大正十一年一月二十三日生れ、昭和十七年徴集で、十八年三月一日、熊本市内の西部第二十四部隊（輜重兵）へ入隊、一期の検閲後、暫く本部にいて釜山から平壤へ。第五十部隊という新設部隊で草ぼうぼうの所でした。そこは第三十師団（約一万二千三十二部隊）私は第三中隊に編入、自動車部隊です。（第一・二中隊は輓馬部隊）。

朝鮮には一年ぐらいいたのです。わが部隊は、はじめは満州の要員部隊のようでしたが、釜山からフィリピンへ出港したのです。輸送船には自動車を組み立て

ないのを積み込んでいました。我々は第二梯団だったようだが、ストリートでルソンへ立ち寄り、何か補給したようだが第一梯団は魚雷を食ってやられたという情報でした。

—その後がミンダナオですか。

ミンダナオのスリガオに上陸して、自動車の組み立てをやった。何時だったか記憶が薄くなったが、初めて艦載機の爆撃を受けた。スリガオから陸路カガヤンへ、自動車は組み立てて自動車隊として行動出来た。道路は平坦で雨でも降れば泥路となるが何とか進めた。

カガヤンへ着いたら大空襲、B 24（コンソリデット）、P 38の銃爆撃で輸送中のわが部隊はねらわれた。昼は空襲、夜ともなればゲリラ、それを気にしながら進んだが、直接はやられなかった。しかし、とに角苦労した。ミンダナオ島内では他部隊の食糧などを輸送していた。

私たち豹兵団はレイテ作戦に行ったのだが、私の部隊は行かずにミンダナオの山に入った。しかし、もう

補給も無く戦力皆無の状態だった。米軍が上陸するというので、自動車も、総ての物も焼いて、上陸する直前に山に入った。持てるだけの糧秣だけを持って入ったのだが、またたく間に無くなった。特に塩が無くて苦労した。

焼畑の芋は親づるは親指ぐらいになり、葉も大きくなるが、根ばかりで、掘っても芋は出来ていない。葉をおしたしにしても塩が無いので、唐辛子のようなものを箸でつついて塩の代りにした記憶があります。

そうこうしている間に陸稲の稔る時になったので鉄帽の中で精米した。何しろ米を食べなくなって半年ぐらいたったので、日本に帰ってから食べた外米とは違って美味かったように思った。蜜柑の原種のような実を切って食べたが、酸っぱいのがうまかったことを覚えてる。

断片的な記憶しかないのだが、ジャングルの奥の奥へ入って煙が出ないように火を焚いたためか空襲は余り無かった。九月か十月頃か、敵の飛行機に見られても銃撃して来なくなったので、「戦争が終わったので

はないか」という人もいたがはつきりしない。

一九月、十月という昭和二十年のことですね、日本軍の将校が空から呼びかけたこともありましたが。

我々はダバオの河の相当上流にいたようだった。原住民の協力で筏を作るのに三日ぐらいかかったが、途中でひっくり返り死んだ戦友もいた。上流は相当の急流でしたから。

三日ぐらいしてダバオに着き、米軍の管理下に入った。我々は五人に一人ぐらしか兵器を持っていなかった。恥ずかしい話だが、かろうじて山の中で行動し、皆栄養失調で、ただ食を求めただけだった。その当時は作戦も無い、すでに米軍は上陸していて、我々は山の中に入っているので命令がはつきり伝わらない。四囲にいる人だけで生活していたから。

今いったように、ダバオへ行って米軍の管理下に入った時は五十―百人ぐらいか、はつきり覚えはないが、地区にいた人だけで下って来た。自分の部隊だけでなく、各隊が随分入りこんでいたようだが、九州の人は

案外少なかった。戦後調べて名簿を作り、戦友会が出来て五―六年になりますが、記憶が余りないので、向こうからいわねなければわからない。何しろ四十―五十年間会っていないから。

一ミンダナオでの戦闘や山への逃避中、いろいろな事があつたでしょう。

行軍中マラリアの場合、熱が出てガタガタして、軍医さんからひっ叩かれ、何とか我慢してついでいった。運が良かった、半分は我慢強かったから生き残れたのでしょう。

行軍途中で手榴弾を抱いて死んだ人は随分いた。意志の弱い人は、原住民にも随分やられた。彼等は長い槍を持って日本人をつけ狙う。一人で谷へ水を汲みにいって帰って来ない人もいた。そのため我々は固まって移動した。五―十人銃を持った丈夫な兵が行って、まとまって食える生活が出来るところを見付けるとそこへ行く。現地人からみると日本軍は山賊みたいなものと思っているから狙われる。

川の中に友軍の死体があると、内蔵だけ無くなって

いる。体の他の部分は何でもない。私も恐ろしい経験がある。集団で行って、三人ぐらい体の弱い人を残して、他の者は食物を物色しに行つた。私も残れたのだが、ついていった。帰って見ると天幕は荒らされ銃も無くなつていて、川の石が血で染まつていた。しかし、戦友の死体は無かつた。あるいは、下流にあつたかも知れぬが、料理されてしまつたのでは、と不安と疑いをもつた。

あの時、私も「体の具合が悪いから」といえば残れた。しかし、皆も体の具合が悪いので、元気な人の中へ混じつて食料さがしに行つたので助かつた。先ず生きるため、それが先、兵隊の戦闘でなく、恥ずかしい話だが。皆バラバラになつた。

―米軍の管理下というか俘虜生活になつてからはどうでしたか。

武装解除されてからは案外寛大に扱われた。体は皆悪かつたが、重労働はさせられなかつた。粗末な天幕生活だつたが、草むしりを一―二時間だが、ただしがんでやつていれば良かつた。

食料は栄養的には考えていたらしい。雑炊（コッテリした）を、余り沢山ではないが食べさせたので、またたく間に皆元氣になつた。希望者だけ陸揚げ作業したが、強制ではなく、元気な人がやつた。行くと缶詰の一―二個は貰えたので積極的にやつた人もいた。

いよいよ帰れるとなつたが、本当かどうか半信半疑だつた。アメリカの貨物船に乗り込んで不安だつたが、伊豆沖を通つた時富士山が見えて、日本へ帰つたと喜んだ。横須賀へ着いたのは十二月だつたが、山の中から出て来た時の服装そのまま、裸足だつたので、見かねてか竹皮の草履を貰つた。

上陸したら横須賀の兵舎へ案内され、そこで粗末だが一通りの被服と、布の編上靴と毛布を貰つた。横須賀から立ち通しの汽車に乗つて、バラバラにそれぞれの故郷に向かつた。昭和二十年十二月でした。

家に帰つて、兄が私より何カ月か遅れて南方のジャワから復員した。父は元氣で弟たちは学校へ行つていない。私は十五歳の時から入営まで欄間彫りをやつていた。復員後は新しく先生について彫刻家となつてや

っている。

同年兵でフィリピンのミンダナオの山の中で、坊ちゃん育ちの人だったが意志が弱かったのか手榴弾で自決した。私は百姓家育ちで我慢強かったので自殺しないで済んだが、観念した時もあった。生き抜けたことに感謝している。この苦勞に耐えぬいた経験が戦後の生活というか、今日の自分にしたものだと思っている。

人間は試行錯誤の中で苦しみ、また失敗を繰り返して少しずつ成長して行くものと思うが、我々の戦争体験は自分ではどうすることも出来ない状況の下におかれていた。人間苦勞すれば自然に生きて行くための知恵やきびしさが身につくことが多いからだと思う。

現代の若者達は戦前に育った私たちにくらべると全く平和で恵まれた条件の中で育っていると思う。それは幸せであっても、人間形成の上では必ずしもプラスでない面もある。精神的に弱い人間であったり、また甘えの強い面が多かったりするように思います。

老兵と妻

兵庫県 伊 森 正 春

私と妻ひろ江が結婚したのは、昭和十六年十一月二日でした。天下の名城姫路城を朝夕眺められる香呂村です。以後、現住所に移り現在に至っています。

当時の姫路は軍都として大勢の軍人がいました。支那事変の関係で出征部隊、帰還して来る部隊と、絶えず日の丸の旗を持った人達が往来し、晴れやかな顔の人や暗く考えこんだような人など悲喜こもごもという様子でした。

私の職業は建築業（宮大工）でした。その頃は新築普請等は少なく一般家屋の増改築や修繕が毎日の仕事でした。非常時という時代ですが、私達夫婦仲よく小さな幸福な日々を送っていました。そうした時職業安定所より呼出しがあり、緊急要員だといって召集を受け、呉の軍港へ連れて行かれました。軍隊輸送船の内